

地域林業構築におけるリーダーの役割について

九州大学農学部 遠藤 日雄

I 最近の低成長期における我が国林業の縮小停滞傾向、その一方で戦後造林木が次第に伐期を迎えてくる。このような状況を背景として日本林業をいかにして活性化させ、「国産材時代」を実現させるのか、その戦略をめぐっていくつかの議論が展開されている。

ところでこうした「日本林業活性化」論議のなかで、林業関係者を組織化する主体、いわゆる「リーダー論」なるものが存在する。林政総合調査研究所の森巖夫氏が精力的に展開されている提言である。

同氏の所論をきわめて簡単に要約すると次のようになる。すなわち、縮小停滞著しい日本林業のなかにおいて、数こそ少ないけれどもめざましい発展をとげている地域がある。そしてそれらの地域には、きまって内発的発展力をそなえた地域リーダーが生き生きと活躍している。従って地域リーダーを育てることこそ地域林業組織化のカギである、と。

なるほど、我々の住んでいる九州地方に限ってみても、例えば熊本県の球磨村や宮崎県の諸塚村などでは、リーダーの果たしている役割は大きいものがある。これらのリーダーを先頭にした地域林業の一定の発展や村づくりの成果に対して大きな評価を与えることにやぶさかではない。しかし、このような現象を我々ほどのように整理して、多くの戦後造林地域の発展に活用していったらよいのであろうか。強力なリーダーが出現すれば、本当に「地域林業」は構築されるのであろうか。

この素朴な疑問をもう少し掘り下げていくと、次のような難問に逢着せざるをえない。すなわち、例えば過疎化に表象されるように、山村問題とはすぐれて経済的現象であるが、これを解明する山村経済論なり林業経済学のなかで、人間がどういうふうな位置づけられ、取扱われるべきかという問題である。元来、経済学には人間の問題が入り込む余地がきわめて少なかっただけに、リーダーの位置づけは非常に難しい作業である。これらの問題を展開しうる力は現在の私にはない。本稿では森氏の「リーダー論」を検討するなかで、私なりのリーダー像を提示してみたい。

II 最初に、森氏の「リーダー論」を検討してみよう。

氏は地域林業の組織化の運動論に果たす市町村、森林組合、公的機関及びその他の団体の役割をまず問いかける。そして現状では、特定の機関を指定することができず、「結局、地域林業組織化の担い手は、地域地域の実情に応じて指定すべきである」としている。

昭和35年、農林漁業基本問題調査会の「答申」によって提起された「家族経営的林業論」や、林構事業展開時にみられた「協業の担い手としての森林組合」の指定などからみると、随分と担い手論議は拡散されてしまったように思える。

それはともかくとして、森氏は結論として、組織や機構を構成する「人」の問題に帰着させている。その「人」とは他ならぬリーダーのことなのであるが、氏はリーダーの要件として次の4つを挙げておられる。すなわち、①確たる信念をもっていること、②豊かなアイデアを有し創造的であること、③旺盛な行動力が²⁾あること、④強い個性の持ち主であることなどである。これらの要件は、数少ない事例にみられるリーダーたちの行動様式から抽出した共通項目であると思われる。そしてそのこと自体については何ら異論をはきむ余地はない。

しかし、森氏の提示された4つの要件から、我々はどうの問題を進めたらよいのであろうか。既に述べたように、戦後造林地域のこれからの発展の糧としてどのように取り入れるべきであらうか。結論から先に言えば、これ以上の展開は難しいのではないだろうか。

何故か。森氏の4つの要件はひとつの結果にすぎないからである。あるリーダーをして、例えば山村振興に奔走せしめたその根拠（あるいは過程）を問わずに完成されたリーダー像のみを提示されるにとどまっているからである。

ここで、リーダーの思想なり行動様式を分析する際に、きわめて示唆に富む次のエンゲルスの文章を掲げておきたい。すなわち、「イデオロギーは1つの過程であって、この過程は、なるほどいわゆる思想家によって意識をもって完成されるものであるが、それはまちがった意識でなされるのである。彼らをうごかして

いる本来の原動力のことは、彼にはしられずにいる。さもなければそれはイデオロギー的過程ではないであろう。だから彼はあやまった。またはみせかけの原動力を想像する。それが1つの思惟過程であるから、彼はその内容と形態を、彼自身または彼の先行者の、純粋な思惟からひきだしてくるのである。彼はたんなる思想材料をもって仕事をし、それを彼は思惟によって作りだされたものとして吟味もせずにとりあげる。そしてさらにかけはなれた、思惟から独立した過程のうでで研究することをしない。しかもこのことは、彼には自明のことになっている。なぜなら、いっさいの行動は、それが思惟によって媒介されるものであるから、けっきょく思惟のうちに根底をもっているようにみえるからである³⁾。

Ⅲ 以上を手がかりとして、私自身のリーダー像の一端を述べてみたい。

戦後造林地帯は、森林地帯ではあっても林業地帯ではない。森林資源が生産力化され、特定の市場と恒常的な結びつきを形成してはじめて林業地帯に転化する。

ところで、「生産力」ということを考えた場合、その基本的要素として(林業)労働、(林業)技術、(森林)資源の3つがあげられよう。この3つのなかにあつて決定的に重要な位置を占めるのはいうまでもなく労働である。ところが、労働の遂行主体たる労働力の存在形態は地域によって異ならざるをえない(例えば、農家林家の支配的な地域、逆に大規模林家が卓越している地域等々)。従つてある地域において「地域林業」の組織化を図る場合(このことは換言すれば、地域の森林資源を生産力化するためのひとつの方策である)、労働力の存在形態に応じた戦略、運動論が展開されるべきであろう。先述の例に即して言えば、農家林家の支配的な地域においては、個別経営を強化しつつ林業生産の組織化を図るのが重要なものに対し、大規模林家卓越地域においては、(林業)賃労働者の雇用問題が第一義の問題になってくるというように、地域によって異なる。

つまり、「地域林業」論議を進めるうえで、労働力の存在形態、もっと言えば地域の生産構造のトータルな認識が不可欠になってくるのではないか。また「地域林業」の内実は、論者によってまちまちであるが、さしあたり「生産から加工にいたる体制の整備」が課題であるにしても、地域のリーダーは、生産論理を基盤として、流通、分配、消費をも展望しうる力量をもった存在でなければならないと考える。これらの基本

的認識を内包していなければ、リーダーは経済現象の把握ができず、なによりも生産者層のかかえている矛盾をくみとれない欠点をもつと思われる。

こうして考えてみると、森氏の「リーダー論」は、生産構造とかけ離れたところで議論されているのではないだろうか。そのため氏のリーダー像を頭に描くと、何も山村に限らず、組織一般に求められている人間像しか浮かびあがってこない。リーダーの個人的な面ばかりを強調すると、経済現象や経済理論が背後に隠され、結局、失敗したのは行動力がなかったからだとか、やる気が不足していたからだとかいうように、責任の所在をメンタルな側面に帰着させてしまう危険性があると言えよう。また逆に、日常の努力を怠り、リーダーさえ現われれば何とかなるといふ安易な「指導者待望論」におちいる可能性もないとは言えない⁴⁾。

Ⅳ リーダーとは単なる個人の資質(もちろんこのことを否定するつもりはない)の問題ではなく、すぐれて地域なり組織の表象として立ち現われる。「人間の意識が彼らの存在を規定するのではなく、逆に彼らの社会的存在が彼らの意識を規定する」というマルクスの定式をまつまでもなく、活力あふれたリーダーを出現させた地域の生産構造の分析が重要であると考ええる。

かつて、明治維新の変革の主体勢力ないし近代化を推進する担い手はいかなる階層であるかをめぐって、「郷土＝中農論」(奈良本辰也氏)や「豪農論」(藤田五郎氏)などが提起された。これらの範疇の今日的意義はさておいても、地域の変革を展望するリーダーの存在を分析する基本的手法は十分に学びとれると考えられる。すなわち、変革の主体と基盤の検出である。

以上のような視角に立ってリーダーが分析されるならば、今まで以上に豊かなリーダー像が提起されるのではないだろうか。実態分析をふまえた私なりのリーダー像の提示については他日を期したい。

引用文献

- (1) 森 敏夫：『山』の政治と経済、pp.306、清文社・東京、1980
- (2) 森 敏夫：『山』の政治と経済、147～149、清文社・東京、1980
- (3) マルクス・エンゲルス選集第15巻、pp.532、大月書店、東京、1954
- (4) 飯田 繁：研究ノート、林業の『活力』『活性化』をめぐる諸見解、林政総研レポート、№13、pp.98。(財)林政総合調査研究所、東京、1980。